

# それからの柴崎芳太郎(下)

## —残された資料から推測する外邦測量の日々—

(株)日本測量協会  
瀬戸島 政博

### はじめに

柴崎芳太郎は、陸地測量部三角科第四班の測量手として、1907(明治40)年の劔岳登頂以降、1916(大正5)年まで東北、北海道の二三等三角測量、愛知・三重・岐阜・滋賀四県の二三等三角点の改測、さらには千島択捉島での一等三角測量、再び北海道の石狩・北見地方での三等三角測量などに従事した<sup>1)</sup>。

柴崎芳太郎は、1917(大正6)年を契機として国内測量から外邦測量へと大きく仕事に変化した。1917(大正6)年には約6カ月間にわたる中国への調査出張、1918(大正7)～1919(大正8)年にはシベリアのバイカル湖方面に出征したようである。1920(大正9)～1924(大正13)年までは台湾の測量作業にも従事した。

そこで、本稿では、1917(大正6)年以降の柴崎測量官の外邦測量の日々を残されたわずかな資料や同時代の関連資料などから推察したい。極めて限られた資料等に基づく論考であることを予めご容赦頂きたい。

### 2. 転機となった測図演習

#### (1917(大正6)年1～2月)

1917(大正6)年の陸地測量部三角科の「大正6年度作業部署表」によれば<sup>2)</sup>、柴崎芳太郎の名前は三角科第一班の調査の欄に記されている(前年の大正5年は第二班に所属)。

これまでに第四班を皮切りに、第三班、第二班に所属してきたが、この年から未経験の第一班調査を担当した。

三交会誌第35号によれば<sup>3)</sup>、柴崎芳太郎には1917(大正6)年1月19日附で「測圖演習ノ爲静岡縣古奈地方へ出張ヲ命ス」という出張命令がみられ、1月11日附の三角科命課では第一組に属し、1月15日～1月26日まで室内予習、1月29日～2月19日まで野外実習と記され、

さらに「右頭書ノ期間地形測量演習ヲ命ス、其實施ニ就テハ別冊計畫ニ據ルヘシ」と書かれている<sup>4)</sup>。

柴崎芳太郎は、2カ月間の実習により地形測量などの測図に関するどのような技術を習得したのか定かではないが、その3カ月後には6カ月間にわたる中国(当時は支那と呼称)での調査出張をしていたことをみると、その当時政情不安な外地での概括的な地形図作成のための調査方法や地形測量などについて、その技術を習得したものと考えられる。

### 3. 残された資料から推測する中国出張の日々 (1917(大正6)年5～11月)

1917(大正6)年5月から11月までの中国出張に関する記録は、三交会誌にわずかに残っている(表-1)。

表-1 1917(大正6)年5～11月中国出張の辞令

| 月 日    | 辞 令   |
|--------|---|
| 5月14日  | 陸地測量手柴崎芳太郎、同石原尊<br>支那駐屯軍司令部御用掛ヲ命ス <sup>5)</sup>       |
| 5月23日  | 陸地測量手柴崎芳太郎、同諸石辰一、<br>同澁田國作、同石原尊支那へ出張ヲ命ス <sup>6)</sup> |
| 11月15日 | 支那へ出張中ノ柴崎、諸石、石原ノ三<br>測量手ハ十一月十五日孰レモ歸京 <sup>7)</sup>    |

では、柴崎芳太郎は、この6カ月間、どこで、どんな調査をしていたのであろうか。まさに「点と線」の推理になってしまう。できるだけ当時の政治事情などを踏まえ、この調査出張を推測したい。

少し歴史を遡ると、1904～1905(明治37～38)年の日露戦争により、旅順・大連の租借権、長春(新京)以南の鉄道とその付属の権利などを得て、満洲(中国東北部)進出への糸口となった。南満洲では、1906(明治39)年には、関東州(旅順・大連を含む遼東半島南部の租借地)

を統治するために関東都督府を旅順に置き、南満洲鉄道株式会社(満鉄)を大連に設立することで満洲中央方面への進出を図った。

1914(大正3)~18(大正7)年には、独・奥・伊の三国同盟と露・仏・英の三国協商による第一次世界大戦が勃発し、日本も参戦し青島と山東省のドイツ権益を接収した。1915(大正4)年には袁世凱政府に二十一カ条の要求を突きつけ、南満洲および東部内蒙古の権益強化を図った<sup>8)</sup>。

柴崎芳太郎は、1917(大正6)年5月14日付の辞令で支那駐屯軍司令部に所属した。支那駐屯軍は、1900(明治33)年5月に勃発した北清事変に伴って派遣した清国臨時派遣隊を基に、第五師団指揮下の混成一個旅団から編成され、1912(明治45)年4月に支那駐屯軍と改称した。

当時の事情を勘案すれば、柴崎芳太郎の中国(支那)出張は満洲(中国東北部)と考えられ、その調査地域は長春(新京)以北で露国の影響が除かれた満洲中央部(哈爾濱(ハルビン)や斎斎哈爾(チチハル)など)ではないかと推測される。満洲の玄関口大連からハルビン、チチハルまでは満鉄本線と東清鉄道で行けた(図-1)。5月23日に辞令交付を受け、出国準備などで5月末ないし6月早々の出発となろう。当時は東京から列車で神戸ないし広島に到り、広島の子品港から門司港へ、さらに門司港から大連港に渡るのが一般的な路程であった。東京からアカシヤの大連市街に着くまでには1週間程度を要し

た。大連からは列車により1車中泊で長春に到着できた。長春はこの地域最大の都市であり、多分数日間かけて現場調査に必要な機材や備品の調達、通訳などの手配をした後、ハルビンやチチハルなどの主要都市周縁の広大な荒野を調査したのではないかと推測する。

満洲の本格的な測量や地図づくりは1931(昭和6)年の満洲事変以降となる。満洲では大正初期頃まで陸地測量部員が主要都市、主要交通路、主要河川などについて歩測・目測・車馬の速度による距離の概略測量や位置を定めるための天文観測などを実施し、満洲・北支那方面の十万分一地形図(見取り図程度)を作成した<sup>9)10)</sup>。

柴崎芳太郎もこのような地形図作成のために、満洲荒野を馬車などで移動しながら村落間の距離(移動時間から換算)、村落戸数、人口、井戸数、農産物などを調査したのではないだろうか。また、渡河の際には川幅、水深なども調査していたかもしれない。

子息の柴崎芳博氏の『一測量官の生涯—柴崎芳太郎伝—』には大変興味深い記述がある<sup>11)</sup>。この調査で柴崎芳太郎は蒙古服を着ていたそうで、夜間天体観測中に外套の上から蒙古犬に腰を噛まれ、その傷跡が永く残っていたと書かれている。また、柴崎芳太郎は暇をみては寺子屋式小学校を参観することが多く、当時小学二年生であった芳博氏と同年の小学二年生相当の教科書を買って求めていたと記している<sup>11)</sup>。

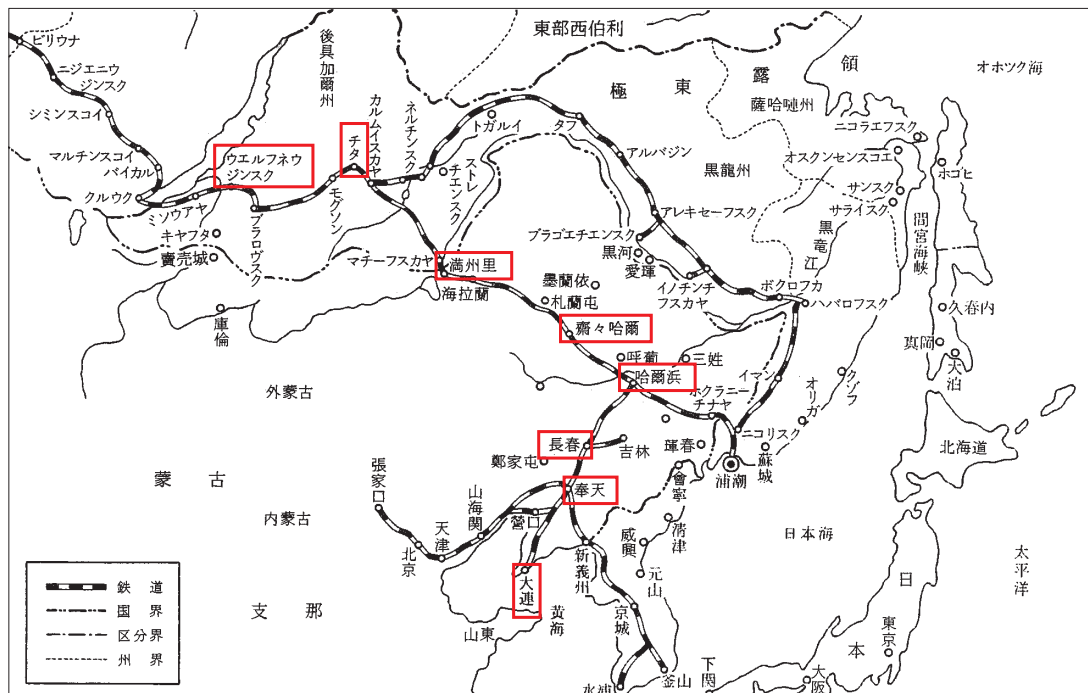


図-1 満洲(中国東北部)~バイカル湖までの道程と主要都市(参考文献28)に記入)

当時の満洲では馬賊が跋扈し、モンゴル人の自治独立気運が高まり、世情不安な中を泥濘の荒野に阻まれながら調査を続けていたものと想像される。

11月15日に帰京したことから逆算すれば、調査結果の整理や旅順の陸軍部への報告、さらには大連港から東京まで路程を含めて2週間程度は要したものと考えられ、満洲での実質的な調査は6月中旬～10月下旬頃までと推測される。

柴崎芳太郎は、この出張期間中の9月26日には勳八等瑞寶章を授与された<sup>12)</sup>。

#### 4. 残された資料から推測するシベリア出征の日々 (出発日不明～1919(大正8)年4月22日)

三交会誌第48号の「大正八年度三角科業務部署表」によれば<sup>13)</sup>、業務部署表の備考欄に「左記ノ者ハ本表外トス」とされ、出征者として記載されている(表-2)。

表-2 大正八年度三角科業務部署表による出征者<sup>13)</sup>

| 地位   | 氏名  |
|------|---|
| 工兵大尉 | 井澤 新  |
| 測量師  | 平木安之助, 松尾義男, 臼井由清, 長 昌信, 若林鶴三郎, 吉野半平, 梅本豊吉  |
| 測量手  | 佐々木利正, 三戸左馬助, 小島莊平, 柴崎芳太郎, 諸石辰一, 矢野助清, 勝島梵震, 丸田元亮, 石原 尊, 小松寅之助, 佐藤富吉, 遠藤亮徹, 重松義雄, 大野幸太郎 |

(表中で青字で示す氏名は大正6年の測図演習参加者)

「出張」ではなく「出征」と書かれ、軍隊と連動していたことが分かるが、いつ頃、どこへ行ったかは不明である。また、三交会誌49号には、臼井、若林、吉野、三戸の各陸地測量師および柴崎、矢野、丸田、石原、佐藤の各陸地測量手が「第二臨時測圖部附ノ處四月二十五日復歸」と記されている<sup>14)</sup>。さらに、大正6年9月に続き、大正7年10月11日にも従七位勲七等を授与された<sup>15)</sup>。

柴崎芳太郎の顔写真の中に大正8年3月20日、ベリヨゾフカ事務所で撮影したのがあり、シベリアのバイカル湖近くに出征していたようである。

柴崎芳太郎のシベリア調査はわが国による1918(大正7)年のシベリア出兵を主因としている。シベリア出兵はロシア革命への干渉戦争であり、1918(大正7)年から数年間にわたり、米・英・仏・日がシベリアに出兵したもので、日本のみ出兵の三カ月後に、さらに増兵(7万3000人)をし、東部シベリアの要地を占領した。その後、1922(大正11)年に撤兵した<sup>16) 17) 18)</sup>。

1919(大正8)年2月1日付の東京朝日新聞をみると<sup>19)</sup>、

1918(大正7)年8月16日に満洲駐劄部隊の一部である藤井中将指揮下の略混成一旅団の支隊を満洲里に派遣したことが記されている。

沿海州・アムール州に派兵された第十二師団は9月5日にハバロフスクを占領し、露国の陸地測量部倉庫に保管されていた管内の広大な領域の地図を接収した<sup>20)</sup>。露国の地図接収とともに、日本軍の出動地域には測図部が派遣された。第一臨時測図部(第十二師団に編成(人員120名)された)、同様にザバイカル州での測図を目的に第二臨時測図部が編成され、人員は120名であった<sup>21)</sup>。

前記の辞令から柴崎芳太郎は第二臨時測図部に所属していたことが分かる<sup>14)</sup>。

当時の陸軍中央部はバイカル湖以東限定方式の既定方針に沿ってバイカル湖東側に日本の排他的支配体制を確立することとし、第三師団の司令部をチタに置き、西の要地ウエルフネウジンスク附近(図-1)に歩兵第三十旅団からなる支隊を駐屯させた<sup>22)</sup>。

柴崎芳太郎がいたベリヨゾフカ事務所はウエルフネウジンスク付近と考えられる。ベリヨゾフカについては、三交会誌第48号に、芳賀嘉四郎による「西伯利概況 大正七年十一月十五日於後貝加爾州ベリヨゾフカ」という報告が掲載されている<sup>23)</sup>。それによると、ベリヨゾフカは、バイカル湖の東30里の所にあり、同湖に注ぐかなり大きな川が町の南部を西流し、東・西・北は山が囲み一見小京都のようでもあるが、バイカル湖山地の防御上最も緊要なる地点であった。歩兵第三十旅団(吉江石之助少将)の駐屯地に測図部があったと記されている。

では、ベリヨゾフカ事務所で柴崎芳太郎はどんな仕事をしていただろうか。多分、明治35年頃に露国極東測量部が作成した既成露版図(8万4千分1)<sup>20)</sup>を基にした測量などではないかと推測される。

柴崎芳太郎が帰京した1919年(大正8)4月22日と第七師団(旭川)が帰還した同年4月25日とは日付が極めて良く整合する。当時の交通事情からすれば同一行動ではなかったかと考えられる。そこで、大正8年4月13日の満洲日日の新聞記事を見ると<sup>24)</sup>、「軍隊更動始まる北行部隊と凱旋部隊」という記事があり、第七師団の一部凱旋部隊500名は4月13日に大連駅に到着し、大連商業学校、実業倶楽部を宿舎として、二日間の休養の後、帰還したと記されている。さらに国内でも東京に向かう途中で盛んな歓迎を受けたようで、そのような中に柴崎芳太郎もいたのかもしれない。

柴崎芳太郎は、帰国後、陸地測量部に復帰し、5月13日付で「第五班附ヲ命ス」と下命され<sup>25)</sup>、5月20日には「五月三十一日出發十月二十五日歸京ノ豫言」で「三、四等三角測量ノ爲第七師管下へ出張」とされた<sup>26)</sup>。

## 5. 北海道地方の三四等三角測量の日々 (1919 (大正8) 年5月31日~10月25日)

柴崎芳太郎にとっては三度目の北海道地方の測量であり、シベリア出征で人脈の多い第七師団管下への出張である。今回は前回までの二等三角測量とは違い、三四等三角測量である。道東の釧路地方の三四等三角測量を担当した。

## 6. 台湾測量の日々 (1920 (大正9)~1924 (大正13) 年)

1919 (大正8) 年までの柴崎芳太郎の足跡は、三交会誌から追うことができるが、1920 (大正9) 年以降は不明である。1920 (大正9) 年以降、1924 (大正13) 年までは台湾の二等三角測量に従事していたようである。

柴崎芳博氏によれば<sup>27)</sup>、柴崎芳太郎は1920 (大正9) 年以降、1923 (大正12) 年関東大震災までは台湾阿里山方面の測量に従事したと書かれている。その間、嘉義庁下の蕃人(ツオウ族)、花蓮港庁下の蕃人(ブヌン族)の蕃社に生活した。これらの蕃人はまだ首狩りの風習を改めず、巡查に守られて測量を続けたようである。

しかしながら、柴崎芳太郎の足跡は、この台湾の測量に従事した頃からはっきりしない。それには、大正2年から発行されてきた「三交会誌」が関東大震災の発生した大正12年に廃刊となったことも影響している。

### おわりに

柴崎芳太郎は1904 (明治37) 年12月第12期として陸地測量部修技所を卒業し、以降は三角科の測量手として第一線で活躍した。国内の測量はもとより千島択捉島、満洲、シベリア、台湾など広範な地域の測量・調査を担当した。このような測量のために一年の三分の二以上が出張であったようだ。

多年にわたる無理がたたわり、1930 (昭和5) 年に脳溢血で倒れ、1年間の療養後に出勤できるほどに回復したが、1933 (昭和8) 年に退官した。そして、1938 (昭和13) 年1月29日肺炎に罹り手当ての甲斐なくこの世を去った。享年64であった。

柴崎芳太郎の生涯は、「陸地測量官タル者ハ緻密ナル頭腦及ヒ強健ナル身體ヲ有スルト共ニ義務心ニ富ミ堅忍不拔ノ氣概アルモノニアラザレバ其任ニ堪ユル能ハズ」(明治41年刊『陸地測量部要覧』)、まさにこの言葉どおりであった。

なお、本稿作成にあたり、数多くの資料のご提供を頂きました国土交通省国土地理院総務部広報広聴室日谷仁英室長(当時)並びに平井英明地図測量広報相談官(当時)には厚くお礼申し上げます

### ■参考文献

- 1) 瀬戸島政博(2009.4): それからの柴崎芳太郎(上)—国内測量の日々—, 測量 Vol.59, No.4, pp.38~40.
- 2)~4) 陸地測量部三交会: 三交会誌第36号, pp.117, pp.42, pp.44
- 5)~7) 陸地測量部三交会: 三交会誌第38号, pp.251, 第39号, pp.296, 第42号, pp.455
- 8) 古屋哲夫(1977): 日露戦争, pp.212-218, 中公新書, 中央公論社
- 9), 21) 測量・地図百年史編集委員会(1970.3): 測量・地図百年史, pp.465, pp.485-486, (社)日本測量協会
- 10) 十五年戦争極秘資料集 補巻30 復刻版外邦測量沿革史 草稿第1冊(358p), 第2冊(389p), 不二出版, 2008.6. 20発行
- 11) 柴崎芳博(1979.3): 一測量官の生涯 —柴崎芳太郎伝—, 国土地理院広報第129号, pp.3-7
- 12)~15) 陸地測量部三交会: 三交会誌第41号, pp.411, 第48号, pp.44, 第49号, pp.88, 第47号, pp.273
- 16) 奥村房夫監修・船木繁編集(1995.4): 近代日本戦争史 第二編大正時代, pp.155~198, 同台経済懇話会
- 17), 20), 22) 原暉之(1990.2): シベリア出兵 —革命と干渉1917-1922, pp.356-386, pp.403, pp.356-386, 筑摩書房
- 18) 陸地測量部(1922.5): 陸地測量部沿革史, pp.296-311.
- 19) 東京朝日新聞(1919.2.1): 「露領出兵経過概要 —陸軍部発表—(1919 (大正8) 年2月1日)」, 新聞集録大正史第七巻(1978年6月大正出版発行, pp.44-45)
- 23) 陸地測量部三交会: 西伯利概况(芳賀嘉四郎 大正七年十一月十五日於後貝加爾州「ベリヨゾフカ」), 三交会誌第48号, pp.16-21
- 24) 満洲日日新聞(1919.4): 「軍隊更動始まる北行部隊と凱旋部隊(1919 (大正8) 年4月13日)」, 新聞集録大正史第七巻(1978年6月大正出版発行, pp.129)
- 25), 26) 陸地測量部三交会: 三交会誌第49号, pp.90, pp.91
- 27) 柴崎芳博(1980): 劍岳登頂をめぐる—ある疑問点について—, 山岳75号, pp.166-181.
- 28) 大正ニュース事典編集委員会(1987.9): 大正ニュース事典第三巻(大正6-7年) 資料編, 毎日コミュニケーション, pp.56